

白鳥の歌なんか

聞えない 庄司薫



中公文庫

©1973

白鳥の歌なんか聞えない

昭和四十八年八月十日初版
昭和五十年十月十日八版

著者 庄司 薫

発行者 高梨 茂

用紙 本州製紙
整版印刷 三晃印刷
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二丁目一番地

振替東京二一三四

定価はカバーに表示してあります

中公文庫

白鳥の歌なんか聞えない

庄 司 薫著

中央公論社

表紙・扉 白井晟一

白鳥の歌なんか聞えない

I

ぼくは春が来るとなんとなく嬉しくてそわそわしてしまっただけだけど、そんなところをひとまえでは絶対に見せまい、なんて変なところで頑張って暮したりしている。何故って、たとえばそんな具合にうっかりそわそわしているところを見せて、何が嬉しいのか、なんてきかれたらもう最後だと思うわけだ。春が来たから嬉しい、なんて正直に答えたら、相手はカンカンに怒るか大笑いするかに決っているし、それになによりもそんな、何が嬉しいのか、なんてきかれること自体がぼくとしては全くザンキにたえないというか、ふがないような気がしてしまっただから。

そこへいくと、女の子ってのは、これは相当に気楽な商売みたいところがあるんじゃないかな、というのがぼくのひそかに抱いている見解なんだ。たとえば、ぼくの小さい時から女友達に由美というのがいて、彼女はまあなんていうか、相当にこう敵ながら天晴れみたいなたかな（？）とところのある女の子なのだけれど、そのくせどういうわけか時々ポカッと勝手に手を抜いて、この「春が来たから嬉しい」みたいなことを平気で言ったりして来るのだ（もちろん彼女だって、相当に相手やTPOを選んではちがいないとは思っただけ）。つまり彼女は、ちょうどぼくの飼っていたドンという犬が電信柱の分布に詳しくあったように、うちの周囲一

里四方ぐらゐの「縄張り」の中の花の分布にやたらと詳しくて、いつどこそこのどんな花が咲くなんてくだらないことを、実によく知っているのだ。そして、たとえば三月十五日頃に彼女が嬉しそうにそわそわした様子でやって来たのを見て、ぼくが「何が嬉しいんだい」なんてきいたとすると、彼女は「斎藤さんちのモクレンが咲いたの」なんて、まあなんていうか、そりゃもう実にしあわせそうな顔をして言ったりするんだ。そして、もちろんモクレンだけじゃない。彼女がそうやってそわそわ来るのが四月なかば頃なら咲いたのは野村さんちのナシの花だし、五月なら川添さんちのデカイキリの花だし、六月ならなんとぼくのうちのタイサンボクってなわけで（みんなデカイ樹に咲く花なのは、塀越しに目立つやつだからだ）、確かにこの世の中には、人間に（というより女の子に）とってのしあわせのタネは沢山あるにちがいない、といった感じがつくづくしてしまうほどのものなのだ。

ところで問題なのは、このぼくは、彼女がそんな具合に嬉しそうにやって来ると、馬鹿ばかりのような気がしながらもつい、「何が嬉しいんだい」なんてきいてやって、そして、へえ、なんて言つて、まるで生まれて初めて見るみたいにそのモクレンやなんかを見に散歩につきあつてサービスしちゃうようなところがある、ってところなんだ。まあこれは、ぼくが一般的に言つて相当の平和主義者というか、平たく言えばつきあひのいい男だつてことの単純な証拠かもしれないけれど、それにしても毎年のこととなると、そこには一種の「渡世の仁義」というだけじゃすまないようなインチキくささがあることを認めるにそうやぶさかじゃない（？）、といった感じもあるんだなあ。つまり、そういう花が咲いたからとか春が来たから嬉しいといった種類のことは、

あいつというか女の子にとにかくとてもよく似合うものだから、それに水をかけるようなことは絶対にしちゃいけない、なんて自分に言いきかせておいて、実はこのぼくもホクホクとおおっぴらにお花なんか見に行く……。ああ、これは相当にややこしいよ。ぼくにだって「心なき身にもあはれは知られけり」ってところがあるのは当り前のことなんだから、なにもそうガタガタ考えることはないとも思うのだけれど、それにしても一体これはどうなってるんだらう。

ところで、今年は三月に入って四日と十二日と二度も大雪が降ったりしたせいとか、由美がホクホクやって来て、ぼくを斎藤さんちのモクレンを見におびき出したのは三月十九日だった。大快晴なんて言葉があるのかどうか知らないけれど、朝から素晴らしいお天気で、朝の十時というのに二階の東南向きのぼくの部屋はポッポとあたたかかった。そしてぼくはもう勇ましく半袖のポロシャツになって頑張っていたのだけれど、たまたま机から離れて窓から外を眺めていたら、向うの西島さんの角を曲って由美がやって来るのがうちの塀の端のユズリ葉とビワの木の間から見えたのだ。彼女はからだにびったりした白いタートルネックのセーターに、濃いブルーのミニスカートをつけて、まっ白なリボンで前髪を抑えて、白いペチャンコ靴をはいて、手をうしろかなんかで組んじやって、なんとなく幼稚園のお遊戯でアヒルの真似をするようなかつこうで、ひと足ひと足うなずくみたいにリボンを振りながらのんびりと歩いてきた。これは彼女が相当に御機嫌な証拠で、ぼくは思わず窓をあけて、アメリカ映画なんかのイカスおニイちゃんみたいに口笛でも吹いてやりたいような気持になったのだが結局のところやめた。そしてぼくが何をやったかと

いうと、実際には大あわてでさっさと窓を離れ、相当に真面目な顔をして机に向って鉛筆なんかにぎっちゃって、描げたノートの上に大きなアヒルのマンガをゆっくりと画き始めた、っていったようなだらしない次第だった。何故って、つまり、まあ要するにぼくだって、口笛吹くのと同じ具合に、たとえば門のかげかなんかで待伏せして、ワッ、キャッ（これは彼女だ）なんてやってみる種類のアイデア（そしてもちろんテレビだと、キャッのあとで彼女はバカァなんて言っただけの腕の中にとびこむわけだ）がうかばないわけじゃないのだが、でもこれが、分ると思うけれどなんとなくためなタチなんだ。それに、考えてみれば相手も相当に悪いってことがあつた。つまり、由美ってやつは、なんていうか、やって来たな、なんて思っただけで待ち構えていても実は素通りしちゃったり、そうかと思うとあきらめた頃になって呼鈴を押したりするような猛烈なまぐれなところが、それこそ一人でうちへ遊びに来られるようになったチビの頃からあるわけだ。そして、こんな女の子が相手となると、たとえばその門のかげからワッなんてのにしても、ひどく滑稽で間の抜けた独り芝居になっちゃう可能性が猛烈大きいのは明らかなんだなあ。ところがその日は、アヒルの尻尾だけ画いたらもう呼鈴が鳴るのが聞えた。へえ。

やがてバタバタと階段を駆けあがってくる足音が聞え、ノックと同時にドアがあいて女中のヨッちゃんかとびこんで来た。

「由美さんです。」

「ふうん。」と、ぼくはまだわき目もふらず机にかじりついていたまま（もちろんマンガを画きながら）なま返事をした。

「門のところでお待ちです。ブラブラ散歩なさってるんですって。」

「へえ。」と言ってぼくは初めて顔を上げ、ゆっくり大きくのびをした。「いいお天気だなあ。」でもぼくは、ちょっとあまりにも見えすいたことをやったような気がして、すぐあきらめた。「すぐ行くよ。」

それからぼくは、まだつつ立っているヨッちゃんの顔をやむを得ずといった感じで眺め、そして彼女の表情から思わずあごに手をやって、三日もそっていないでザラザラする髭をなでた。

「ちょっとお待ちくださいって言うておきましようか？」と、彼女はえらく真面目くさって心配そうな顔をしてたずねてきた。

「え？ ……うん。」と、ぼくはあごをなでながら観念してうなずいた。

ぼくは、彼女が威勢よく階段を駆けおりていくのを確かめてからガバと立ちあがり、それからちょっと考えて着換えをした。つまり、黒いポロシャツにGパンというぼくの野戦服(?)を、明るいグレーのセーターと濃いグレーのスラックスに着換えたといったわけなのだ。まあ、こういう髭だとかセーターだとかいったことは、どうでもいいことじゃないかと心の底では思っているのだけれど、でもおそらくはそれだからこそ、かえってそういうことをウカツに表に出して強調したりしてはいけないというような気もどこかでするわけだ。つまり、おかしい言い方だけれどぼくは、たとえばベーターペンが穴のあいた靴をはいて髪をふり乱して歩いていたたり、晩年のブルーストが薄汚れたヨレヨレのカラーで晚餐に出てきたり、マルクスがチョッキのボタンをいっつもかけ忘れてたり、毛沢東がサエない綿帽子をかぶっていたり、ゲバラがお風呂に入らず汗く

さい野戦服でいたりするなんていうのを、猛烈カッコいいと思っちゃうようなところがある。でも問題は、というか、ぼくにとつての弱みは、（まあ当り前のことだけれど）彼らがカッコいいのは、彼らが実際にどういうなりふりをしたかではないということ、つまり彼らがそうなったのは言うなれば必然的な結果というか、彼らがその力を使いつくすためのほんとうに大事なことを別にしっかりと手いっばいに抱えていたことによる、という点にあるのは言うまでもないわけだ。つまり逆に考えれば、そういう「なりふり」をどうでもいいこととしてしかもそれを公然とひとまえでやって「善良な市民」をオドカス（？）以上は、それに見合うような大事ななにかをしつかりと見つけてやりとげなくちゃいけないのじゃあるまいか、なんて殊勝にも思い始めてしまう。そしてこういうのは、一旦思いついたらもうだめみたいなところがあるわけなんだ。つまり「第九」を書いてる最中のベートーベンでもないのに髪ふり乱してこぶしをふりあげて一見大芸術家風に（？）歩いたり、ほんとうに革命をやってるゲバラでもないのにお風呂にも入らず汗くさい野戦服で闊歩したりするのは、気恥かしいというかなんというか、とにかくもういけなくなる。まあぼくだっていまにほんとに全力を傾けるような大事な仕事を見つけて夢中になって、乱闘服で髪ふり乱してチョッキどころかズボンの前ボタンまでかけ忘れて歩いたりできれば本望だとは思ふ。でも、まあそれまでは、頭の中では「どうでもいいことじゃないか」と思いつつも、大体においてヨッちゃんの忠告なんか素直に従って、着換えたりお髭をそったりしてひとまえに出ていくのがまあ分相応らしいと、あきらめてるようなわけなんだ。

ぼくは大急ぎで髭をそり、MG5のローションでいい気持にピリピリしながら、白いペチャンコ靴をはいて、ノソノソと出ていった。

「いいお天気だわあ。」と、門柱に軽く寄りかかるようにして空を見あげていた由美が言った。

「うん。」と、ぼくも空を見あげた。眩ゆいばかりの青空がいつぱいに広がっていて、ところどころにやさしい絹雲がうかんでいた。

それからぼくは目を戻してちょっと彼女を眺め、(さすがにもはや口には出さなかったけれど)目で、例の「何が嬉しいんだい」の大サービスをしてやった。彼女は、ちょっとまいったような眩しいような目ばたきをして、軽くあごをつき出すような仕草でおそらくは斎藤さんちの方をさすようにした(と、まあぼくは思った)。ぼくたちはそしてブラブラと歩き出した。

「どうしてた？」と由美がきいてきた。

「うん、まあね。」

考えてみれば、ぼくたちがこんなにのんびりと会ったのはずいぶん久しぶりのことだった。彼女の方は、入学試験とか卒業式でドタバタしていたし、ぼくの方も、大学こそ受けなかったけれどそれだけにいろいろ考えたりやったりすることがあったし、その上、別に相談したわけじゃないのだがほかにも大学進学に熱意を失った友達があちこちにいて、お互いに情報を交換したり、なんとなく「メダカは群れたがる」風に出会ったりして、ガタガタしていたわけだ。

「ねえ、気がつかない？」と彼女は、大学のことをまたいろいろと考え始めていたぼくにきいた。「え？」

彼女は、目を軽く閉じて、肩のところで渦巻いている髪をちよつと揺するようになった。

「香水つけてんの分らない？」

「……？」

「ミス・ディオールっていうの。ほかにもらっちゃった。シャネルにイブ・サンローランにね……。」

「へえ。」

「大学の合格祝いね。あなたも大学に行ってれば、もらえたかもね。」

「(え?)」

ぼくは、彼女がけんかを売るつもりなのかどうかを確かめようと、チラッとその顔をうかがったけれど、どうやら殺気はないようだった。

「香水って、フタをあけたら、すぐジャブジャブ使わなくちゃいけないんですって。でも百メートルも先から分るなんてやあね。そしたらどうなるかしら。」

「さあ、どうなるかなあ。」

「あなた、風邪ひいてない？ 鼻つまってちゃ困るのよ。試してるんだから。」

「風が吹いているから分らないよ。」

「ここんときよ。」と言って、彼女は右手の指先で耳の上の毛を上げるようにした。ぼくは首を振った。

「ほんと？」彼女は立ちどまって、髪の毛をひっぱるようにしたまま、耳をすますようなえらく

真剣な表情で、微かに鼻をうごめかした。「オーデコロンの四倍だなんていうから、恐る恐るだったんだけど……。」

それから彼女は、口の中で小さく、あーあ、と呟くと、急にややとってつけたような感じではあったけれど、ふん、というように頭を上げて、少し早足になって先に歩き出した。ぼくは、あまり露骨に追いかける様子も見せず、といってわざと遅れたままみたいな感じにもならないように、といった相当に微妙な感じで（あーあ、全く女の子ってのは手がかかるんだ）ゆっくりと追いついていった。

やがて斎藤さんのうちが近づき、ぼくたちは、白い漆喰の塀の上に、高さ五メートルはありそうな大きなハクモクレンが、まるで大きな若い白孔雀が初めてその羽根を拡げたように、まだ開きかけの白い花をいっぱいにつけているのを見つけた。ぼくたちは、道をへだてて反対側のうちの塀に、背中をくっつけるようにして並んでもたれかかり、しばらくうっとり、このぼくたち二人の春のしるしともいうような柔かく若々しく美しいハクモクレンに見とれた。春がほんとうに来たんだ。

ぼくがこっそりと左わきに肩を並べた由美を眺めると、彼女は心なしに頬を紅潮させ、少し口をあけてモクレンを見つめていた。ぼくはなんとなくすぐに目をそらした。そして何故ともなく深く息を吸うと、まるで柔かなモクレンの花が匂うかのように、彼女のつけた香水のやさしく爽やかな香りが突然のようにぼくを包みこんだ。

2

でも、それにしてもしみじみと思うのだけれど、ほんとうに、女の子を相手にした時のことの成行きってやつは分らないものなんだ。つまりぼくたちは、それからまたブラブラと歩き出してすぐそばの小さな公園の中に入りこみ、ちやうど誰もいなかったのでまん中の花壇のわきの古ぼけた木のベンチに腰かけた。そして彼女はえらく御機嫌で、例のつまらない「鎌倉の大仏」の話なんかし始めたのだけれど、このあたりまでは、ぼくたちは確かに一点非のうちようもないほど友好的にやっていたわけなのだ。つまり、こんな具合だった。

「あなた、鎌倉の大仏いつだったか知ってる？」

「鎌倉の大仏？ さあ、いつだったかな。鎌倉幕府は一一九二年だろ？ えーと……と。なんだい、そんなのが試験問題に出たの？」

「え？ ううん。」

「じゃあ、なんだい？」

「鎌倉の大仏はいつだったか。」

「だからさ、分らない。ダメだ。」

「まだ、たってないのよ。」

「え？」

「すわってるのよ。」

「……！」

まあ、これは、言われるまでもなく、実にみつともないほど他愛なくてくだらない話だけれど、でもなんていうか、そんなくだらないことでもなんとなく楽しい感じの時ってのがあつたものなんだ。そして、だからぼくたちがそんな感じでしゃべり続け、やがて話が司馬遷のことになって、ぼくがつい最近ききかじったばかりの「宮刑」なんて術語をふりまわした時も、ぼくとしては彼女に対する警戒網をすっかり外して、ほんとに軽い気持ちだったのだ。そして彼女の方も、へえ、どうやるの？ ああ、チョンギツちゃうの？ なんてごく軽くノツてきたわけなのだ（少なくともぼくはそう思ったわけだ）。そして、ところがどういうのだらう、要するに事態はこんな具合に進展することになってしまった。

「ちがうよ。チョンギツちゃうなんて、そんな簡単なんじゃないんだよ。縛っちゃうんだ、付根のところを。そうすると血液がいかないから、だんだん腐ってくるんだってさ。腐りやすいように、わざと湿気の多い暗い部屋に入れとくんだって、ね？」

「あら、でも、それでどうなんの？」

「どうなんのって？」

「ううん、だって、ほら、男のひとのって、あ、二つの役をするんでしょ？」